

# 3

## くにぶりのうたまい 風俗歌舞 一祭が育む日本の音一



森田 玲 MORITA Akira

玲月流初代 篠笛奏者  
株式会社篠笛文化研究社/代表取締役

神輿を昇る掛け声、笛や和太鼓の祭囃子は、いかにも日本の祭という感じがする。私たちが普段耳にする音楽は概ね西洋式のものであるが、祭の中で奏でられる音曲は、日本の音である。古くから祈りをこめて今なお奏でられている祭音楽の魅力と意義を紹介する。

村の鎮守の神様の  
今日はめでたい御祭り  
どんどんひやらら・どんひやらら  
どんどんひやらら・どんひやらら  
朝から聞こえる笛太鼓

『村祭』文部省唱歌<明治45 (1912) 年>

祭祀列島につぼん。我が国では、宮中祭祀や官制社寺の祭や法要、そして、各地の農山漁村をはじめ、都や城下町、門前町や宿場町など全国津々浦々で、豊作祈願の春祭、疫病退散の夏祭、祖霊祭の盆踊、収穫感謝の秋祭など、一年を通して様々な祭が営まれてきた。

近代以降、特に高度経済成長期に日本の風景は一変した。しかしながら、祭には往時を偲ぶ姿があって、こと、音に関して言えば、視覚的風景ほどには破壊されていない、いにしへの音風景が残っている。

美しい笛の遠音、身体に響く太鼓の音、心躍る祭囃子。私は京都を拠点に、竹の横笛「篠笛」の演奏・指導・製作・販売・調査研究を行っている。篠笛の出自は祭である。篠笛を語るためには祭を知っておかねばならない。祭のフィールドに出かけること、文献を読むことが、私の中では篠笛奏者としての義務となっている。

### 西洋化した日本の音風景

本稿の主題は祭の音であるが、故あって、まずは現代日本の音楽環境について述べてみたい。今、日常生活で日本音楽を聞く機会は皆無である。耳にする音楽は、すべて洋楽の理論に基づく旋律で、保育園のお遊



図1 祇園祭。皇都祇園祭礼四條河原之涼『三都涼之図』<部分> (国立国会図書館)



図2 伊勢大神楽。獅子髪洗ひ乃図 (筆者蔵)

戯も洋式、小学校ではより積極的に「正しい」西洋12平均律(ドレミ)の習得が望まれる。このような洋音生活は、いつの頃からか。

日本の音環境は明治維新を挟んで一変する。欧米列強国との対等関係を目指す中で、明治5 (1872) 年に学制が公布。唱歌(歌)・奏楽(楽器)の授業開始も急がれた。明治12 (1879) 年、音楽研究・教師養成機関として文部省に音楽取調掛が設立。儒教の礼楽思想の影響もあろうか、その目標は「国歌の創成」であり、それは和洋折衷を以て目指された。

ところが、互いに深い文化基盤を持つ両者の折衷は土台無理な話であり早々に頓挫。以後、旋律は西洋、歌詞は日本語という形式が一般となった。いわゆる文部省唱歌の多くがこれに当たり、郷愁を誘う『蛍の光』の原曲はスコットランド民謡であるし、『ふるさと』も残念ながら伝統的な日本の旋律ではない。冒頭の『村祭』も、歌詞は良いが洋式のメロディーである。因みに、わらべ歌や労働歌、祭囃子、卑俗とみなされた三味線音楽などは、無視、除外、もしくは歌詞の改変の憂き目に遭う。「和」にも相当なバイアスが掛かっていたのである。

以来、百数十年、文明の開化に引きずられ自ら日本文化を手放した結果、日本人の音感ハドレミに矯正され続け、ランドセルを背負った小学生がリコーダーを吹いて歩く姿が「日本の音風景」となった。笑えない喜劇だ。もはやドレミは日本文化と対応される西洋文化ではなく、日本文化をも説明できる万能の科学と誤認された感がある。

明治以来の西洋音楽一辺倒の音楽教育の中で、平成14 (2002) 年には、中学校での和楽器の指導が必修となった。ところが、近年、クラウドファンディングを用いて人工繊維の「篠笛風洋楽調横笛(ドレミの笛)」を作り、全国の学校に無償配布しようとする許容しがたい動きがある。ドレミの笛の、祭と学校への進入だけは防がなければならない。

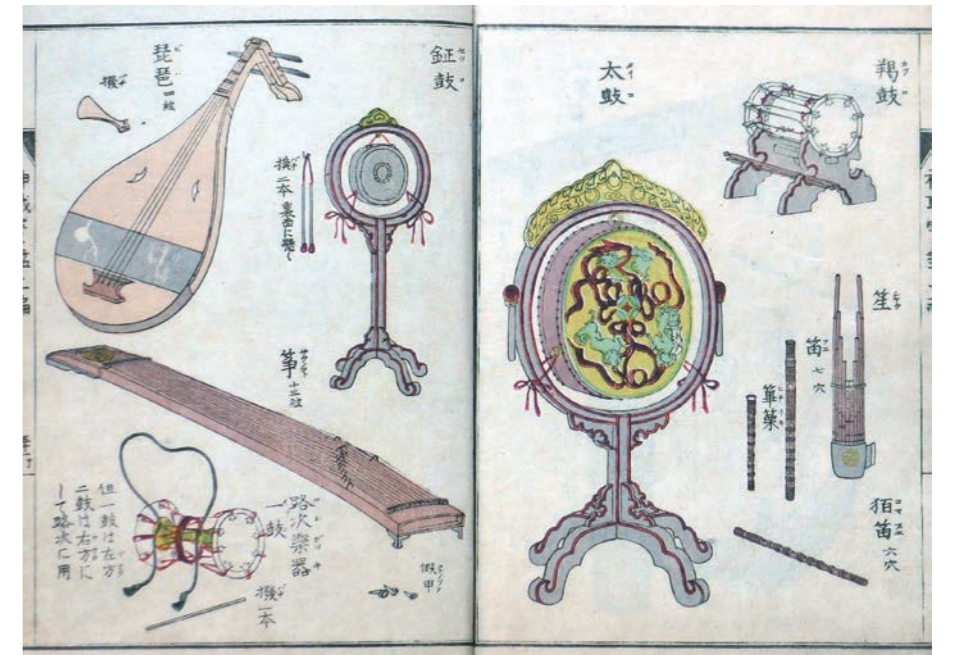


図3 雅楽の楽器「神職寶鑑」(筆者蔵)

### 古代のアジア音楽の摂取

明治期の洋楽の摂取と相似的に捉えられることがあるのが、飛鳥・奈良時代のアジア音楽の摂取である。東大寺大仏開眼会には、日本の芸能だけでなく、伎楽や散楽、唐楽、高麗楽、林邑楽、度羅楽などアジア各地の芸能が披露された。この時に使われた装束や楽器は正倉院に残されている。渡来した芸能の楽器や音曲は、後に、日本人(主として皇族や貴族階級)の好みに合わせて整理統合され、平安時代には催馬楽や朗詠といった歌曲も生まれた。このような外来楽舞や新しい歌曲に、古来の日本を源流とする御神楽や東遊などの芸能を含めた、祭祀、饗宴のための芸能の総称が雅楽である。

先進国の制度を、憧れを以て取り入れるという点において、確かに西洋音楽摂取期とアジア音楽摂取期に類似点が見出せる。しかしながら、芸能の享受層の違いに注意が必要であろう。古代の外来音楽の享受層は、皇族や貴族、官制社寺に属する伶人などに限られるが、近代の外来音楽の享受層は、日本に生まれたすべての子供たちであった。

江戸初期に八橋検校が創始した箏曲の源流を辿れば雅楽の楽箏であるし、各地の祭に出る獅子舞の源流は伎楽の一演目であることなど、雅楽の民間への影響はなかったとは言えない。ただ、庶民の感覚とは大きな隔たりがあった。例えば、雅楽を雅楽たらしめているといっても過言ではない楽器に箏と笙がある。前者は

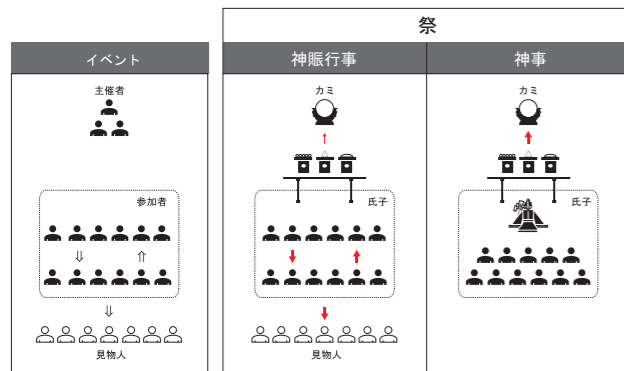


図4 神事と神賑行事

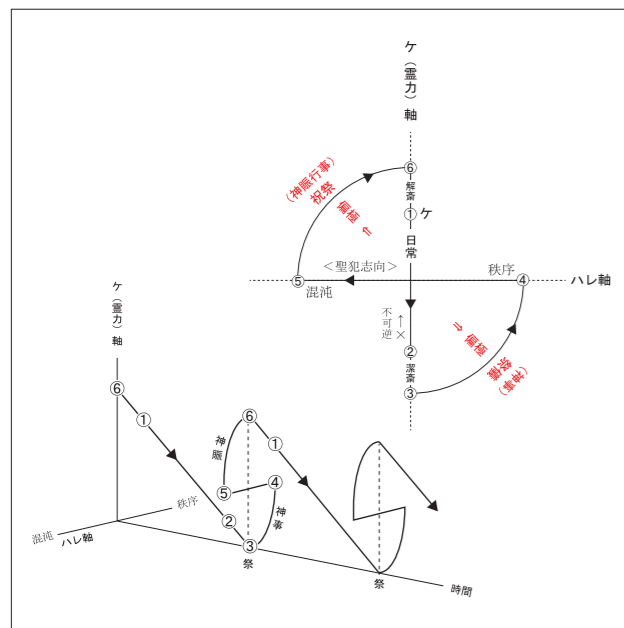


図5 ハレ(祭=神事+神賑行事)を通して更新される共同体の活力(ケ) <園田稔『祭の現象学』の掲載図を基に筆者が作図>

ピーという大音量の旋律楽器で、後者は喩えるならパイプオルガンのような複数音で幻想的な空間を作り出す。これらの異国情緒溢れるアジアの音は、ついで、一般の民俗芸能で用いられることはなかった。現在、全国各地の神事で雅楽の音が聴かれるのは、明治期に全国統一の神社祭式が整えられた後の、いわゆる国家神道の影響である。

当初、違和感を持たれたであろう西洋音楽も、西洋式軍楽の採用や洋楽調の音楽授業を通して耐性が付き、ついには日本人の嗜好に変化が訪れ、洋楽を積極的に好むようにもなる。パン食が当たり前になった経緯と似ているかもしれない。

### 祭の中は日本音楽

大河ドラマや時代劇の音楽までもが洋楽であること

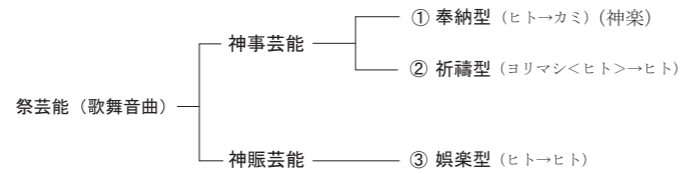


図6 ヒトの心の方向性を基準とした祭芸能の分類(試案)

に誰もが疑問を抱かない現在、日本の音はいずこに。雅楽・能楽・人形浄瑠璃(文楽)・歌舞伎といった古典芸能は、今以て命脈を保っており、舞台などに足を運べば東の間の日本文化を楽しむことができる。しかしながら、より日本文化の基層にあった、わらべ歌や、田植歌などの労働歌は壊滅状態であるし、現行の流行歌はすべて洋楽理論の作曲で、さらには、洋式の楽曲であっても日本人が作曲したものならば「邦楽」という、歪曲も甚だしい分類法が定着している。

とは言え、悲観ばかりもしてられない。我々には祭がある。祭の音は、明治維新という大きな壁を貫通し深い溝に橋を渡す、明治以前と以後とを繋ぐ「文化のタイムトンネル」なのである。

### 神事と神賑行事

祭の音を理解するためには、祭そのものの理解が必須である。「祭」を漠然と年に一度のハレの舞台と捉えるのではなく、「神事」と「神賑行事」という二つの局面に分けて捉えると「祭」の本質が見えてくる。ヒトの心が、カミに向く場面が「神事」、ヒト同士や見物人に向く場面が「神賑行事」である。概して「神事」は厳粛な雰囲気の中で保守的、「神賑行事」は華やかで革新的と言える。ただし、その雰囲気だけでは判断を見誤ることもある。例えば、厳粛な神幸祭(カミの道行)もあれば賑やかな神幸祭もあるが、両者とも「神事」である。あくまでもヒトの心の方向性で区別したい。

### 祭の社会的役割

共同体の祭とは、神社を核として、氏地の環境、氏子の精神状態を日常(ケ)とは異なる次元(ハレ)に移行させることによって、共同体の活力を更新するための「民俗知」である。ハレには華やかなイメージがあるが、極端な秩序(神事)と極端な混沌(神賑行事)の両方に適用し得る概念であり、非日常と言い換えても良い。

祭のような社会装置は日本の専売特許ではなく、人類が社会性を持った時点で獲得された叡智であろう。そうであるならば、祭をMATSURIとして世界の人々と



図7 神事芸能(奉納型)。二月初卯石清水八幡宮神楽の図「諸国図会年中行事大成」 写真1 神事芸能(祈禱型)。巫女神楽<浪速神楽>(京都ゑびす神社) 写真2 神賑芸能(娯楽型)。秩父夜祭の屋台芝居

も議論ができそうだ。

### 祭芸能の性格三態

祭を音で演出するのが、笛や太鼓、鉦などで奏される「祭音楽」である。

「〇〇神楽」「〇〇舞」「〇〇踊」などと呼ばれる祭の芸能は、先学を参考にすると、その形態から、巫女神楽、採物神楽、神代神楽、湯立神楽、獅子神楽などに分類される。ただし、同じ芸能であっても場面によって演じる目的が異なることがあり、この分類法にも限界がある。そこで、芸態ではなく、「神事・神賑行事」と同様、ヒトの意識の方向性に注目して、祭の芸能を以下の三つに大別したい。

#### ①奉納型・神事芸能

ヒトの意識がカミに向けられる芸能・演目を「奉納型・神事芸能」と呼ぶ。これが狭義の「神楽」にあたる。

#### ②祈禱型・神事芸能

ヒトが神威を借りてカミの代理人(ヨリマシ)となり、ヒトに対して清祓や悪魔祓などを行なう芸能・演目を「祈禱型・神事芸能」と呼ぶ。巫女が参拝者に鈴を振る、獅子が頭を噛むといった場面が想像しやすい。

#### ③娯楽型・神賑芸能

ヒトの意識が、氏子同士や見物人に向けられている芸能・演目を「娯楽型・神賑芸能」と呼ぶ。

「奉納型・神事芸能」の演目が、時間と場所を変えて「娯楽型・神賑芸能」として演じられることも少なくない。ここでは、身体表現をとまなう芸能について述べたが、山・鉦・屋台などの祭車の道中囃子は「娯楽型・神賑芸能」の音楽と言えよう。このように芸能を分類して祭を見ると、祭の音風景の解像度が一気に増す。

### 学校教育と民俗芸能

深刻な後継者不足の芸能もある。祭は誰のものか? 祭は、そこに住まう過去・現在・未来の氏子のものと言える。ただ、日本の中から日本文化が急速に失われていく現在、その共有範囲を少し広げて、近郷近在の学校の授業に導入するというのも悪くはないのではないかと考えることがある。芸能にとっては先人たちが育んだ文化遺産の緊急避難措置となるし、子供たちにとっては和風ではない真の和と、地域文化に触れることができる絶好の機会となろう。

### 民俗歌舞と未来の子供たち

日本音楽のゆりかご的な役割も果たしてきた産土神の祭。明治期に流行した中国の明清楽や維新前後の軍楽の旋律が祭囃子として使われる例外もあるが、概して「祭は日本」であった。

新元号・令和の典拠は、わが国最古の和歌集『万葉集』。今後、強い関心を以て日本文化、地域文化が見直される時代が来ることを予感させる。「祭は文化のタイムカプセル」。今ここに、次世代に伝えることができる、文字や映像ではない「生音の祭」があることを喜びたい。

古く律令時代には、地域固有の芸能を風俗歌舞(くにぶりのうたまい)と呼んだ。祭の音は「くにぶりのおと」であり、その紡ぎ出される「音霊(おとだま)」からは地域のアイデンティティが溢れ出してくる。未来の子供たちにも、祭の中で得られる、この筆紙に尽くしがたい喜びを体感して欲しい。そして、そのような未来の実現に向けて、微力ながら貢献できればと思う次第である。

#### <参考文献>

- 1) 園田稔『祭りの現象学』弘文堂 1990
- 2) 森田玲『日本の祭と神賑』創元社 2015
- 3) 森田玲『日本の音 篠笛』篠笛文化研究社 2017
- 4) 『日本音楽大事典』平凡社 1989